

主 題：最後まで目標を目指して

聖書箇所：ピリピ人への手紙3章12-14節

新年度最初のメッセージということで、何に心を留めるのが皆さんの励ましになるだろうかと考えているうちに、一つのみことばにたどり着きました。今回準備する中で、自分自身にとっても改めてこの箇所はチャレンジと励ましにもなりました。ということで、この朝はピリピ人への手紙3：12-14を見てみたいと思います。

ピリピ3：12-14

「:12 私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして、追求しているのです。そして、それを得るように時リスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。:13 兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕らえたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、:14 キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」

●最後の言葉：

死を目前にした者が発する最後のことばは、その人物について多くのことを教えてくれます。特にかつての信仰者たちが残したことばを見る時、私たちはそこに彼らが最後の最後まで持っていた神様への揺るがない確信を見て取ることができます。たとえば最初の殉教者となったステパノ、彼は死の直前このように叫んでいました。「……「主イエスよ。私の霊をお受けください。」……「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」」（使徒7：59-60）と。思い返せば、自分の死が間近に迫っていることを知っていたパウロも、最後に記した手紙の中でこのように述べていました。「:6 私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来しました。:7 私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。」と。また、もちろんこれは聖書に登場する人物に限った話でもありません。18世紀にイギリスやアメリカで熱心に働いていた牧師ジョージ・ホウィットフィールドも同じです。その生涯において1万8千回以上にもわたって説教したと言われる彼は、死の床でこんなことばを口にしました。「主イエスよ。私はあなたの働きの中で疲れ果てていますが、あなたの働き自体に疲れたものではありません。もし自分の使命が終わっていないのであれば、もう一度、野に出て、あなたのために語らせてください。真理を確かに伝え、そして家に帰って死なせてください」と。また最後にもうひとりだけ。19世紀に活躍したD・L・ムーディーという牧師も、亡くなる前日まで行っていた伝道集会を体調不良で切り上げ、帰宅した後、家族に向かってこんなふうには語っていました。「私は落胆していません。役に立てる限り生きたいと思っています。ですが、仕事が終われば、すぐに天へと去りたいのです」と。生きていた時代はそれぞれに違っています。でも彼らに共通していたことがありました。彼らはみなキリストを信じて救われた時から、最期の日に至るまで忠実に走り切った者たちでした。主の働きへの情熱や喜び、主への信頼や愛情というものが決して変わることはなかったのです。

でも、このような人たちの話を聞き、歩みを見る時、私たちは思うことがあります。いったいどうして彼らはそのように歩めたのだろうか。果たして彼らは私たちと違って、何か特別なクリスチャンだったから、そんな歩みが可能だったのでしょうか。いいえ、彼らも私たちと何らかわりません。彼らもただ恵みによって、信仰によって、キリストによって救われた者たちでした。彼らは今の私たちと違って、何の困難も経験しなかったからでしょうか。忠実であることを妨げるような試練に直面しなかったからでしょうか。いいえ、彼らもそれぞれに大きな苦しみを味わいました。ステパノは人々から激しく憎まれて、石打ちに遭いました。パウロはもう言うまでもありません。鞭に打たれることもあれば、牢に入れられ、

飢え渴き、寒さに凍え、友人に裏切られ、教会から非難され、罪との葛藤を経験し、死にかけたことすら何度もありました。ホイットフィールドは4カ月の愛する息子を失ったこともあれば、重い病を患うこともありました。ムーディーも福音の真理に堅く立ち続けるのに反対する者とのさまざまな闘いを経験しました。彼らの足を立ち止まらせてもおかしくない出来事は、もう山のように存在していたのです。悲しみや失意に暮れて、神様を疑い、途中で歩みを止めてもおかしくないような状況は数え切れないほどありました。しかしそれでも彼らはその歩みをやめなかったのです。最期の時まで愛情や情熱を失わなかったのです。

どうしてそんな歩みが可能だったのでしょうか。その一つの答えを、きょうの聖書箇所は私たちに教えてくれています。走るべき道のりを実際に走り切った人物——パウロを支え続けた秘訣が特に四つ、今回のみことばには記されていたのです。その四つの秘訣を新年度の最初に一緒に考えてみましょう。この一年もそれぞれの歩みにおいて、喜びや楽しみだけではなく、いろいろな苦しみや葛藤にも直面すると思います。病によってからだの弱さをさらに経験することも、兄弟姉妹との関係がこじれて痛みを覚えることも、親しい人を失って悲しみを味わうことも、罪との終わらない葛藤、戦いに失意を抱くこともこれから先、あると思います。私たちの足を道の途中でとめて、別のものに向けようとするさまざまな試練や誘惑はあるでしょう。でも、そんな難しさにあふれる中でなお、私たちも彼らと同じように、最後まで忠実に歩み続けることはできます。弱い私たちを支え、力づけるのに十分で大きな助けとなるものをみことばは与えてくれているのです。では実際にどんな秘訣を、どんな助けをみことばが教えてくれたのか——。早速見てみましょう。

○最後まで走り切るための四つの秘訣

1. 正しい不満足を抱き続けること 12 a、13 a 節

まず、最後まで走り切るための一つ目の秘訣が12節、13節の前半部分に記されていました。それは正しい不満足を抱き続けることです。もう一度みことばを見てください。パウロは12節を「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして、追求しているのです。」と始めていました。パウロはここで彼自身が持っていた強い思いを口にしました。

▶「追求する」

「追求している」ということばが使われていましたが、これには人が何かを捕らえる目的で追いかけるとか、しつこく追い求めるといった意味が含まれていました。間違っても、手のあいた時に何となく後をつけて行くのではありません。自分が望んでいるもの、自分が手にしたいもの、自分の目の前にあるものをどうにかしてつかまえたいと必死になって後を追いかけていく、そんな様子です。まるで逃げようとしている泥棒を追う警察のように、目の前の獲物を必死になって追っているハンターのように、優勝を目指して走り続けているランナーのように、パウロはほかのものは置いて、必死になってただ捕らえようとして、後を追いかけていたのだと言うのです。では、彼は何をそんなにも追求していたのでしょうか。この12節だけを読むと、具体的には触れられていません。ただし文脈を読んでみれば、それが何であるかはすぐにわかります。少し戻っていただいて8-11節に、パウロは自分自身が手にした何にかえがたい喜びを繰り返し語っていました。全部は見ませんけれども、8節に「それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。」と書いています。9節では「キリストの中にある者と認められ、……すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。」と言います。10-11節には「:10 私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、:11 どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。」と言っています。パウロは何をそんなに喜んでいたのでしょ。何にすばらしさを見出していたのでしょうか。思い返してみてください。パウロは以前、いろいろなものに自分の誇りを見出していた人物でした。純粋な血筋や社会的地位、熱心な信仰生活や伝統や律法を熱心に守

り行うことこそが、自分に救いをもたらすと信じて疑わずに生きてきました。しかし、そんな彼がイエス・キリストに出会いました。そして彼はただイエス・キリストを信じる信仰によって罪を赦されるということを知りました。ただイエス・キリストにあって義とされるという喜びを知りました。十字架に架かって死なれ、墓から復活された方が持っている、人を新しく造りかえることのできる力というものを味わったのです。パウロにとって、本当の救いをもたらすその救い主こそが最高の喜びでした。それに代わるようなものは何もなかったのです。

だから彼はその方をさらに個人的に知っていくことを望みました。あのダマスコの途中で、主のすばらしさを少し味わいました。でも彼は、まだまだ自分はこの方のすばらしさを全部は知っていないとわかっていました。この方のうちで生きていくことの喜びを全然知っていないと。この方の力によって、新しく造りかえられて、この方とともに生きて、この方とともに苦しんで、この方とともにいつか復活することができるという、その楽しみをまだまだ自分は知っていないと。だからもっとこの方を深く知って、この方を愛する者として歩んでいきたいと。こうしてパウロは、自分が愛している方をより知っていくことを望みました。そこに満足をすることはありませんでした。イエス様とともに歩んで、イエス様のように変えられていく、そのすばらしさを知っていくということを彼は必死になって追い求めていたのです。そんな彼は13節でも同じように述べていました。「兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕らえたなどと考えてはいません。」と強調していました。パウロは正しい不満足を抱いていました。彼は自分自身の状態をよく理解していました。変わることをない主に対する飢え渇きというものが彼の足を絶えず突き動かしていたのです。

そしてこの正しい不満足、飢えというのは、私たちひとりひとりの歩みにおいても決して欠かすことはできません。皆さんも何かの食べ放題やバイキングに行ったことがあるかと思います。食べ放題の前は、みんな楽しみにして、朝ごはんやお昼を抜いて、最初の一口目はもう信じられないくらいおいしかったりします。でも30分後、1時間後、2時間後は、不思議なことに、最初に食べて絶賛した物と同じ物を食べているはずなのに、味が全く別物に変わったかのように感じる場合があります。いや、むしろお腹がいっぱいになっていけば、おいしかったはずの食べ物にいっさい関心を示さなくなるばかりか、もう要りませんと拒絶するようになるのです。食べる前と食べた後では何が変わったのでしょうか？食べ物自体が変わったわけではありません。変わったのは、私たちのお腹の状態です。私たちが満足を覚えたその時に、同じ食べ物に対する見方が変わってしまったのです。そして残念ながら、これと同じことが信仰生活にも起こることがあります。気をつけていないと、私たちは主に対して自分勝手な満足を覚えるようになるのです。

果たして、私たちは今も変わらずに正しい不満足を持っているのでしょうか。イエス・キリストを最初に知った時、福音がもたらしてくれた罪の赦しや永遠のいのちを、主とともにいることができるという喜びを知った時と同じ飢えを覚えているのでしょうか。それとも自分がもうすでに知ってしまったこと、すでに味わったことによって満足感を覚えてしまっているのでしょうか。みことばを読んだり、祈ったりすることを通して、神様を知りたいという熱意は増し加わっているのでしょうか。それとももうお腹いっぱいですと、途中で足を止めてしまっているのでしょうか。すごいのは、この正しい不満足を口にしていたのは、あのパウロだったということです。罪人であった自分を救い出してくださった主の愛を知った彼は、その主の愛を知り続けるという歩みをやめることはありませんでした。福音を語り続けていく時に助けてくれる主の力というものを、試練の中で励まし続けてくれる主の慰めというものを、罪との戦いの中で希望を与え続けてくれる主の助けや救いというものを、彼は自分自身のこととしてますます知って、楽しみ続けて、そこに満足を見出そうとは思わなかったのです。そして、彼がそうなのであれば、私たちは言うまでもありません。この中ですでに捕らえた人はひとりもいません。私たちもともにいてくださる主のすばらしさをすべて味わったわけではありません。むしろ主を知っていくという、永遠に続いて

いく歩みは、まだ始まったばかりなのです。正しい不満足を抱き続けるということ、それが最後まで走り続けるために欠かせない一つ目の秘訣でした。

2. 揺るがない土台に拠り頼み続けること 12b節

次に、二つ目の秘訣は、揺るがない土台に拠り頼み続けることでした。みことばに戻っていただいて、12節の後半で、パウロはこう述べていました。「そして、それを得るようとキリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。」と。

▶「得るように」「捕らえてくださった」

興味深いのは、訳者は日本語の聖書では別のことばをあえて使っていますが、実はこの「得るように」と「捕らえてくださった」と訳されていることばには、もともと同じギリシャ語が使われていました。そしてどちらにも何かを自分のものにする、手に入れる、勝ち取るといった意味のことばが使われています。ということは、12節の後半を言いかえるとすれば、こんなふうに言うことができるのです。「そしてそれを捕らえるように、自分のものにするようとキリスト・イエスが私を捕らえてくださった、自分のものにしてくださったのです」となります。大切な順番に気づきますか？すべての始まりは、パウロではありませんでした。パウロ自身が最初にキリストを知ろう、キリストを手にしようとして歩み始めたわけではありません。すべての始まりはキリストでした。まずキリストがパウロを自分のものにしようとしてパウロを捕らえ、救ってくださった。そのキリストの働き、キリストこそが彼の歩みの土台だったと言うのです。決して逆ではありません。パウロは義と認められるために義を求めたわけではありません。義と認められたからこそ、義としてくださった方を求めました。救われるためにきよさを求めたわけではありません。救われたからこそ救ってくださったきよい方に似た者となることを追い求めたのです。

考えてみてください。当たり前聞こえるかもしれませんが、すでに死んでしまっている木はどれだけ水をやったとしても、豊富な栄養の入った土を与えたとしても、そこから芽が出ることはありません。どれだけ一生懸命に朝晩丁寧に手入れをしたとしても、花や実を実らせることはありません。そもそも死んでいるからです。死んでいるものが実を結ぶために必要なのは、周りの良い環境でも、周りの努力でもありません。新しいいのちでした。私たちも同じです。かつて私たちもみな罪と罪過の中に死んでいました。かたくなに逆らい、生きていた私たちは完全に汚れていたからこそ私たちのなすどんな正しい良い行いも、神様の前にはすべて価値のない不潔な着物のようなものでした。しかしそんな汚れていた罪深い私たちが、キリストに出会ったのです。キリストに出会って、恵みによって救われて、新しいいのちが与えられました。キリストの十字架にあって罪を赦されて、咎を洗い流されて、きよく傷のないものとして私たちは新しく造りかえられました。新しく造りかえられたから、私たちはみことばに従って罪とも必死に戦おうとするのです。それは、神様から好意を得るためでもなければ、まだ赦されていない残っている罪の贖いを自分の手で完成させるためでもありません。ただ罪の奴隷から解放してくださった、こんな自分の罪を赦してくださった主を愛するからこそ、その主が愛されることを喜んでなしていこうとするのです。

ですからこの先、自分自身の歩みの中において大きな困難に直面して、足を止めてしまいそうになるような時があれば、まずキリストが私たちを捕らえてくださったということを思い出し続けることです。まずキリストが私たちを自分のものとしてくださったということをです。そしてキリストが自分のものとしてくださったからこそ、私たちはこの方とともに生きていくことができ、この方をさらに知る者として歩むことが可能になったのだということです。すべての始まりはキリストでした。この方こそがどんな時も拠り頼むことができる私たちの歩みの土台なのです。だからもしまだ皆さんの中に、この土台である方をそもそも知らない方がいるのであれば、自分の罪を悔い改めることなくキリストを救い主として、主として信じ受け入れずに、懸命な己の努力によって信仰生活みたいなものを歩もうとしているのであれば、その生き方はやめてください。そうではなく、どうかまず自分の罪を素直に認めて、神様の

前に悔い改めてキリストを信じ受け入れてください。そして救いは勝ち取ったものではなく、恵みによって与えられたものとして、主に感謝しながら、主のすばらしさを自分のものとして知っていく、生き方を歩んでください。揺るがない土台に拠り頼み続けること、それが最後まで走り切るために欠かせない二つ目の秘訣でした。

3. 一つの焦点に目を留め続けること 13b節

続けて、最後まで走り切るための三つ目の秘訣は、一つの焦点に目を留め続けることでした。13節でパウロははっきりとこう言っていました。「兄弟たちよ。私は、自分はずでに捕らえたなどと考えるはしません。ただ、この一事に励んでいます。」と。容易に読み取れたかと思えます。パウロの思いはいろいろなものに向けられてはいませんでした。彼の関心はバラバラになっていたわけではありません。パウロの焦点はただ一つキリストを知ることだけに向けられていました。それが彼の歩みの最優先事項でした。信仰のレースを走っていた彼の目はどんな時も自分が目指している目標であるキリストにのみ注がれていたのです。一般的なレースを考えれば、当たり前なことだと思います。たとえばもし運動会で、ずっと周りをキョロキョロしながら、時に手を振ったりして走っている子どもがいたら、私たちは何と声をかけるでしょう。「かわいいですね」ではなくて、おそらく「ちゃんと前を見て走らないと危ないよ」と注意するでしょう。周りのものに心が取られてゴールを見ていなければ、コースを外れてしまったり、何かに引っかかって転んでしまったり、何よりもそのレースに勝つことができなかつたりするのです。どれだけ幼かろうと、どんなランナーにとっても大切なことは、目標を見続けることでした。そこにのみ焦点を置き続けることでした。そしてこれは、私たちの信仰の歩みにおいても同じことが言えるのです。ヘブルの著者も信仰者たちが置かれている競争をこんなふうに描いています。ヘブル12：1-2に「:1 こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。:2 信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。」と書いています。「信仰の創始者であり、完成者であるイエス」様に焦点をしばっていなさいと。だとしたら、私たちは一つの焦点に目を留め続けているのでしょうか。それともいろいろなものに心が惹かれて、最も優先すべきことから目を逸らしてしまっているのでしょうか。実際、私たちの周りは数多くの物であふれかえっています。すばらしいものも良いものもたくさんあります。ある人にとってそれは趣味や娯楽かもしれませんし、テレビやスマホ、お金や食べ物かもしれません。それ自体は何も悪いものでも、罪でもないものは周りにたくさんあります。でももし私たちがキリストよりも別の何かを優先させて、キリストよりも別の何かに自分自身の心や思い、考えを囚われ続けているのであれば、残念ながら私たちの焦点はずれているということです。最後まで忠実に走り切るためには、一つの焦点に目を留め続けることが決して欠かせませんでした。私たちはみな譲ることのできない優先順位というものをきちんと守る必要があるのです。

一度自分に問いかけてみてください。今、自分の歩みにあって、キリストへの愛を増し加えるのを助けるのではなく、逆に奪い去っていくようなものはないでしょうか。でもパウロはここで、「一事に励んで」いきなさい、それだけでことばを終えてはいませんでした。彼はこの一事に励むことに関して、後でまたさらに説明を加えます。一つの焦点に目を留めて歩むことが実際にはどんな姿なのか、どんな様子なのかということを、ことばを足して描いていました。13節の続きで「ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、」とパウロは言っています。一つの焦点に目を留めて生き続けていくというのは、言いかえると、うしろのものを忘れて前に進み続けることでした。でもこの「うしろのものを忘れ」とはどういう意味でしょう。パウロは突然これまでの記憶をすべてなくしてしまいなさいという話をしているのでしょうか。それは不可能です。簡潔に言えば、これは前に進み続けていくために意図的に過去を思い出さないということです。前へ前へと進む足を以前に起きた出来事によって邪魔させないということです。

でもこれだけではよくわからないかもしれません。パウロの立場になって考えてみてください。もし仮に、パウロが過去にとらわれているような人物だったとしたら、少なくとも彼は自分のしてきた数々の功績というものを誇りとすることもできたでしょう。このピリピの手紙を書いた時、パウロはすでに約20年もの間、キリストとともに歩み、キリストに仕え続けてきました。幾つもの教会を建て上げていただけでなく、ガラテヤやコリント、テサロニケ、ローマ書などの手紙も記して、たくさんの人たちを救いへと導いてきたのです。その気になれば、自分の過去を前面に押し出して、人々に訴えることもできたでしょう。私がこれまでにやってきたこと、なしてきたことをすべて見てくださいます。また、もし仮にパウロが過去にとらわれていた人物だったとすれば、その反対に、彼は自分がしてきたことに対して罪悪感や絶望を覚えていたかもしれません。なぜならキリストに出会う前の彼は、何よりもクリスチャンを迫害することに情熱を注いでいたのです。教会を荒らして、家に押し入って、男も女も関係なく引きずり出しては牢に入れて、拳銃の果てに最初の殉教者となったステパノを殺すことにも賛成していました。そんなパウロが救われた後、自分が犯した以前の過ちというものを思い返して、苦しんで罪悪感に苛まれたとしてもおかしくはなかったでしょう。自分はひどいことをした、どうしようもないダメな人間ですと。パウロは前に進み続けていくその足を、過去の出来事によって妨げさせるようなことをしなかったということです。勘違いしてほしくないのは、過去のことを忘れ去っていたのではありません。過去のことを悔いていなかったのでもありません。そのすべてのことを知っていた上で、過去も、今も、すべてのことをただキリストにゆだねていました。過去に余りにもひどいことをした自分を知らなかったわけではありません。でもそんな自分さえ救ってくださり、そんな自分さえ用いてくださる神様に心から感謝して、その方にすべてをゆだねていたのです。

だから彼は実際にこんなことばをいろいろな箇所で繰り返していました。Iコリント15:9-10で彼は「:9 私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。:10ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」と言っていました。ここだけでなくIテモテ1:13、15でもこんなふうに言います。「:13 私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。:15「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にいられた」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」と。過去を覚えていなかったのではありません。その過去を赦してくださった神様のあわれみに、恵みに、赦しにゆだねていたということです。

私たちはどうでしょう？ある人は過去に自分がなしてきたことに、ずっと目を留めているかもしれません。これまで私は何十年も教会に通いました。いろいろな奉仕をしてきましたし、聖書も何度も読んだこともあるし、いろいろな知識も持ってきました。たくさんの人にも伝道してきましたと。もちろん神様のために行ってきたこと、これまでの忠実さというものはずばらしいものです。でも神様の前に問われるのは、今も変わらずにその足が前に進んでいるかどうかです。問われるのは、過去ではありません。今、どんなふうに教会に通い、今、どんなふうに奉仕をし、今、どんなふうにみことばと向き合っているかです。以前と今ではどんなふうに神様に対する感謝が増し加わっているかです。またある人は過去の自分の罪にずっと目を留めているかもしれません。こんなひどい罪を犯した自分は決してもう赦されることはありませんと。救われる以前だけではなくて、ましてや救われた後も何度も何度も神様を悲しませてしまったような自分は、もうどうしようもありませんと。でもそんな人も覚えていてください。私たちに与えられた罪の赦しというのは、私たちの何かに基づいたものではありません。神様ご自身が神様ご自身の御子を私たちに与えてくださり、信じるすべての者の罪をすべて十字架に架けて赦してくださったのです。だから罪が増し加わるそこに、主の恵みも満ちあふれるのです。

もし私たちがキリストを忘れて、過去の功績や成功に目を留めて歩み続けて行くのであれば、私たちは自分勝手な満足や誇りを抱くようになります。もし私たちがキリストを忘れて、過去の失敗や罪にのみ目を留めて歩いて行くのであれば、私たちは前に進んでいく喜びも力も失われていきます。だから最後まで走り続けて行こうとするのであれば、一つの焦点に、私たちの愛する救い主イエス・キリストに目を留め続けていくことが欠かせないことだったのです。それが私たちにとっての喜びの源になるのです。

4. 最後に待っている報いを覚え続けること 14節

最後まで走り切るためには正しい不満足を抱いて、揺るがない土台に抛り頼み、一つの焦点に目を留め続けるだけではありません。四つ目の秘訣は、最後に待っている報いを覚え続けることでした。パウロは14節で「キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」と述べています。これまでに長い距離を一度でも走ったことがあれば、よくわかると思います。長距離走ほど大変なものはなかったりします。最初は元気に走り始めても、なぜかどこかのタイミングで必ずからだのあちこちが痛くなってきます。そして疲れてくれば、頭の中でささやく声が聞こえてくるのです。もう疲れたし止まればいいのではないかと。十分頑張ったのだから、途中でやめても何も言われなんでしょうと。そんな時に走り続ける人は、どうやってそれを乗り越えるのでしょうか。言えるのは、自分に残されたあとの距離を考えて、そしてただゴールに目を留め続けることです。辛さや苦しみを抱えているその真ただ中であって、走り切った後、待っている喜びや楽しさに心を留めて、何とか最後の力を振りしぼって足を動かそうとするのです。先のゴールラインを、最後に待っているものがはっきりと見えているということは、その人にとって大きな活力を、大きな励ましを与えることになるのです。そしてそれこそがまさにパウロ自身の歩み方でもありました。

パウロがこの手紙を記した時、彼はローマの自宅で鎖につながれて軟禁状態に置かれていました。彼には地上での将来がどうなるかは何もわかっていなかったのです。言うまでもなく、この時点までに数々の試練や迫害、病を経験し続けてきた彼のからだはもう疲れ果ててボロボロだったでしょう。ましてや次の日には、皇帝の前に立って裁判を受けて、その結果処刑されて殉教する可能性も大いにありました。彼が自分自身を見れば、疲れも痛みも苦しきも、何より文字どおり死というものもそこにあったのです。でもそんな困難な状況の中で、パウロは足を緩めることは一度もありませんでした。それはここを見るのではなく、ゴールラインを切ったその時、そこで自分を待っていてくれるお方がだれなのかということを知っていたからでした。最初にダマスコの道で自分が知った主のすばらしさ、そこから今の今に至るまでずっと最も知りたいと、いつでもともにいたいと願い続けてきたそんな愛する主が最後に待っていてくれると、その主に最後会うことになることと確信していたからこそ、彼はどんな時も変わりませんでした。ここで何が起こっていたとしても、彼の目はいつも先を見ていたのです。だから彼は目標を目指して必死になって一心に走り続けていたのです。感謝なことは、この希望、この喜びは彼だけのものではないということです。恵みによって救われて、キリストとともに歩んでいる今の私たちひとりひとりに同じように報いが待っています。それを得るのは、この地上での死を迎えた時か、再び主が帰って来られる時か、それはわかりません。でも私たちにも必ず主にお会いする日はやって来ます。その主を目の当たりにする日はやって来ます。

あのヨハネもはっきりとこんな約束を口にしていました。Iヨハネ3:2に「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」と。「見るかもしれませんが」ではなく、「見るからです」でした。ゴールラインの先に用意されているその報いが確かなのだとすれば、問われるのは今どのようにして歩むのかということです。永遠に主とともにいることができるという、何にもかえがたい喜びや楽しみが目の前にもう用意されているのだとすれば、地上での残りの人生を、日々をどのように過ごしていくのかということです。私たちが待つて

いてくださるその方を前にして、あなたのために今なせるすべてのことを、私は忠実に、必死になしていきますと、最後まで忠実に走り切ろうとしているでしょうか。それとも待っていてくださる方には目を留めずに、その道中にあるいろいろなものに心を奪われて、時間や労力をそのようなものにだけ費やして、途中で足を止めてしまうでしょうか。

私たちは感謝なことに覚え続けることができます。主と会う日はやって来るということです。あした、最後の日を迎えるかもしれません。そうだとしたら、私たちはどんなことばを残すでしょう。「最後までやり切りました」ということばを私たちは残したいのです。ですから皆さん、この一年もいろいろなことがあります。いろいろなチャレンジもあるでしょうし、いろいろな喜びもあるでしょう。でも私たちの目は常にキリストに向け続けなければいけません。最後の最後まで主が召してくださるその時まで、目標を目指してともに走り続けましょう。